

伊能忠敬(いのう ただたか)

伊能忠敬は日本全国を測って地図を作った人として有名です。寛政12年(1800)から文化13年(1816)まで、17年間にわたり全国各地を測りました。忠敬は佐原村(千葉県香取市)で酒造業を営んでいましたが、その商売を息子に譲り、50歳のときに江戸(東京)へ出て勉強しました。そして55歳から10回にわけて全国各地で距離や方角を測りますが、その間に測量隊が歩いた距離は約40,000キロ(地球一周分と同じ)にもなりました。忠敬は文政元年(1818)に亡くなってしまいますが、地図作りは弟子たちによって続けられ3年後に地図が完成しました。

全国を測る

忠敬たちは日本全国を10回に分けて測量しました。前半の4回の測量で東日本を測り終えますが、この時は忠敬が多くのお金を出して測量しました。地図の正確さに感心した幕府は、後半の西日本測量はお金を出してくれました。そのため隊員の数も増え、より詳しく測量することができました。でき上がった伊能図は幕府に提出され、正確な日本地図として大正時代まで約100年のあいだ使われました。幕府に提出した地図は明治時代に焼失しますが、写された地図が全国各地に残されています。記念館で展示している地図の多くは、伊能家に残されていた地図です。



忠敬たちが作った日本地図 (東京国立博物館所蔵)

大日本沿海輿地全図といい、海岸線と主要な街道を描いています。目印にした山や島からは朱線がたくさん引かれています。写真は日本全体を8枚に分けて書いた中図で、1枚の大きさが約2m×1.5mもあります。



伊能忠敬の肖像画

杖の先に方位磁石をつけたもので、方位盤が水平になるように工夫されています。全国の測量で一番使われた道具で、「わんからしん」ともいいます。



杖先方位盤 (つえさきほういばん)

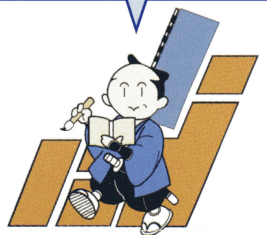
測量方法と地図作り

忠敬の測量方法は、前方に立てた目印(梵天)が北から何度の方角に見えるかを測り、そしてその目印までの距離を測ります。それを毎日繰り返していきました。宿では1日に測った分を地図にまとめ、江戸へ戻ってさらに大きな紙に書き写して日本地図を作りました。完成した地図は、日本列島を3枚に分けて描いた小図、8枚に分けた中図、214枚に分けた大図という3種類がありました。(上の図は方位盤で方角を、間縄で距離を測っているようすです)

展示室で今の地図との違いを探してみよう。

ヒント

何枚で地図ができていたかな？
くわしく測った場所はどこ？
北はどっち？



御用旗(ぎょうよばた)

測量隊が御用(国の仕事)であることを示すために、作業のときに立てた旗です。